

— 特別寄稿 —

「キートとの出会い」

JMRC九州地区協議会 理事長

徳尾

大学を卒業して、私なりにやってみたくて見つけかけていた時、志半ばにして、家業に付く事を余儀なくされた。それでも来年か再来年か、脱出のチャンスを見出そうと努力は試みたがすでに家業の中心に位置する様になり、自分の思いはひよつとしたらわがままかも知れない、そう思い始めた頃、「あんたのやりたい事は私が死んでからにしておくれ」と明治生まれの母から言われた時、静かに決心をした。

父親を高校一年の時に亡くした。それでも東京の私立大学に行かせて呉れた母と兄、そして仕送りは二年で終わった。自分で何とかやってみるからと家族の言葉に反対してバイト、バイトで明け暮れる東京に残り、卒業まで五年かかった。その時の母も、兄も後年に亡くした。

そのころの思いは現在も、私の心の中に大きな位置を占めている。

モータースポーツに参加するようになったのは昭和三十七年頃からで、仕事の休みを利用して、専ら社会人で構成されたラリーで、ラリーチーム広島、いすずカースポーツ、と広島、大阪、と遠征も度々だった。数年たった頃、大学主催のラリーも身近に見かける様になり仲間も増えたし大勢で出かける事がだんだん多くなった。広島大ラリー、山口大ラリー、鹿児島、大分、そして九工大ラリー。学生の作るラリーは計算がむずかしかった。戦績としては良い思い出はあまりない。でもどれも楽

しかった。

ラリーと言うものは、こう言うもので、こう有るべきものだ、とラリーの構成が私の中に型造られた頃、当時、藤原元一教授が自動車部々長をされていた九工大ラリーに参加した、あまりにひどいラリーについて我をも忘れ、分もわきまえず、表彰式の直前にクレームの数々を並べて学生達にラリー作りの姿勢を正した。

その後、藤原先生からの依頼も有り私の主宰するオートクラブ北九州(A.C.K.)の全員で九工大ラリーの応援、主催を手助けするようになった。勿論彼らも我々の主催競技の時はチーム員として参加し手助けをして呉れている。

貧しい学生生活は、ある程度自信も有ったしそれなりに戦って来た私から見えて気になる学生を見かけた時、見過ごす事は出来なかつた。学生と楽しく過ごそう、そう思ったのは、はつきり言つてこの頃から始まつた。

夜になるとだんだん日ごと集まる学生も増えてきた。他愛もない話を肴に良く酒も飲んだ。そんな学生の膝の中で寝込んでしまつた私の子供たちも、最近では自動車部の学生が何人か工場の事務所に来てゐるよ、と言う様に成長してしまつた。長女は嫁ぎ、次女は教職、長男は家業を共にして呉れているし、三女も企業に勤めている。

今でも私は、学生達に「三郎さんいますか」「三郎さん新款コンパは今度の土曜です、よろしくお願いします。」と言つた調子で話しかけられるが、これでよいのだろうかと思つている。時々娘たちに「三郎さん食事ですよ」と声をかけられて笑つてしまふ事もある。

仕事を手伝つて呉れている息子もラリーをやつてゐるし、最近では学生達の車に関する相談は殆ど息子に集中してゐて、仲良くやつてゐるのを見るのも楽しい今日この頃ではある。

東京、名古屋、京都、長野、そして熊本、佐世保、と随分多く卒業生の結婚式にも招かれ参列の榮にも浴した。それぞれ良い結婚式だった。そして皆お父さんになつて夏休みで帰省の途中などに立ち寄つては良いパパぶりを見せてくれる。

就職で旅立つて行く学生達は、その近くの先輩に在住の先輩の所在を知らせ、積極的に連絡を取るようにと薦めているが、どうも、その繋がりが発展が見えないのが残念に思える。でも同期の卒業生同士の連絡と、その付き合いは永く保たれてゐると聞いて、ある程度は安心している。

私は六十五歳、妻も五十七歳になった。私達の年齢を追いついて行く学生はさすがにいないが、社会的には遙かに高く、すばらしい仕事で活躍している者が多い。そんな話に触れる度について嬉しくなってしまう。いまだによく連絡をくれる川越

君、相変わらず酒はよく飲むようで、バリクダカールラー等、海外ラーリーに参加し、三菱車の面倒を見ながら活躍している。少し後輩になるエンジニアで坂井 君、無限の監督のような立場でF1の世界では世界の開催国で活躍している。奥さんと二人の息子さんたちは日本でしっかり留守を守っていると聞く。もう少し後輩に坂田 君、学生時代は車のメンテナン斯巴かりやっていたような生活だったが、日本板硝子に入社しその後フイリピン工場の起ち上げに成功して、近く日本に凱旋帰国するとき、いる。

学生時代のモータースポーツにおける彼らの活躍もすばらしかった。九州に九工大自動車部あり、金、銀、銅と上位独占時代を築き上げて、その名を広く知らしめた功績はとても大きいものだった。

先年、忘れられない事があつた。私が六十歳で還暦を迎えた時、家庭では話題にはしたけれどさして実感もなく、どちらかと言えばそつとやり過ぎた気が持ちていたのは否めない。そうしている内、突然「楽しいイベントを計画しているので、広島の大ト競技場の近くのホテルに集合して下さい。」との連絡を受け妻と参加した。それはまぎれもなく「三郎さんの還暦を祝う会」と書かれたお祝いの席だった。真つ赤な装いを余儀なくされ、皆から祝福を受け花束に記念品まで贈られて、もうどうしようもなく、泣き出したいくらいに嬉しかった。翌日は大ト競技場でのタイムトライアルに参加しOB達に混じつて半ばくらいの順位で走れたことに満足している。現在ブラジルに行っている幹事の津曲 君、大勢のOB諸君、ほんとうに有難う、楽しかった。何時までも忘れずあの日の感激を胸に、残りの人生は倍にして頑張るから。

今も毎年、年末の仕事を終えた十二月三十日、朝から私の工場の入り口で、現役の当番学生、その年入学の一年生、彼らが餅つきの支度をしながらOBの掃りを待つ。一人、二人と遠くから帰ってきた彼らと餅を搗いたり、おでんをついたりしながら現役の学生を交えたOBたちの語らいの声がだんだん大きくなって来る。そうして新年を迎える。

これも今や、ささやかな年中行事で、その年のしめくくりとしている。